

## 和解

昔、京都に、若い武士があつた、主家の没落のために貧しくなつたので、遠國の守になつて下る人に仕へる事になつた。都を去る時、この武士は妻を離別した、——善良にして綺麗な女であつた、——實は立身のために別の縁組をしようと思つたのであつた。それから或家柄の娘と結婚して、自分の任地へ連れて行つた。

和

しかしこの武士が、愛情の價値を充分理解しないでそれ程無造作に捨て去つたのは、無分別な青年時代で、苦しい貧乏を経験して居る時であつた。彼の第二の結婚は幸福ではなかつた。彼の新しい妻は冷酷で我儘であつた、そして彼は京都時代の事を考へて名残惜しさにたへなかつた。それから彼はやはり第一の妻を愛して居る事——第二の妻を愛する事のできる以上に彼女を愛して居る事を發見した、そして自分が如何に義理知らずで、又恩知らずであるかを感じて來た。彼の後悔は次第に悔恨となつて、彼に心の平和を與へなかつた。彼がつれなくした女の記憶——彼女の物靜かな言葉、彼女の微笑、彼女のやさしい美はしい振舞、彼女の非難の打ちどころない忍耐、——それがたえず彼を惱ました。時々彼は彼女があゝの困窮の時分に夜晝働いて彼を助けた時のやうに、彼女が機を織つて居るのを夢に見た、もつと度々見たのは、彼女が哀れな破れた袖で

涙をかくしながら、彼が彼女を捨てて来たあの淋しい小さい部屋にただ獨りで坐つて居る姿であつた。公務の間にも、彼の心は彼女の方へさまようて行つた、それから彼は彼女がどうして暮らして居るだらう、何をして居るだらうと考へて見た。再縁はしてゐないだらう、それからどうしても自分を赦さないと云ふ事もなからうと何となしに思つた。それから彼はひそかにできるだけ早く京都に歸つて彼女をさがして見よう、——そして彼女に赦しを願つて、つれ戻して、償ひのために何でもできるだけの事をしようと思つた。しかし歳月は過ぎた。

たうとう守の任期も満ちたので、この武士の役目も一先づ終つた。『さあこれから自分の愛する者のところへ歸る』彼は自分で誓つた。『あれを離別した事は何と云ふ残酷な——何と云ふ馬鹿な事であつたらう』彼は第二の妻（子供はなかつた）をその親許へ歸して、京都へ急いだ、それから、旅装束を取り換へる暇も惜んで——直ちに昔の妻をさがしに出かけた。

彼女の昔、住んでゐた町に着いた時は、夜は深くなつてゐた。——九月十日の夜であつた。——そして都は墓地のやうに靜かであつた。しかし明月が一切の物をあかるくした、そして造作なく家が見つかつた。住む人がないやうであつた、屋根には高草が生えてゐた。彼は雨戸をたたいたが、誰も答へる者はなかつた。それから、戸は内から締りはしてない事が分つたので、彼は押しあけて入つた。入口の間には疊も何もなかつた、寒い風が板の間の隙から吹いて来た、月の光は床の間の壁の粗い割目から洩れて来た。外の部屋は皆同じやうに荒れ果ててゐた。この家はどう見ても住む人はないやうであつた。それでも武士はその家のずつと奥にあるもう一つの部屋、

——彼の妻のいつも休息所であつた甚だ小さい部屋へ行つて見ようと決心した。その境になつて居るふすまに近づくと、彼はその中にあかりの見えたので驚いた。彼はふすまを開いて驚きの叫びを上げた、即ち彼はそこに彼女が——行燈のあかりのわきで針仕事をして居るのを見たのであつた。彼女の眼は同時に彼の眼と合つた、そして嬉しさうな微笑をもつて、彼女は彼に挨拶した、——ただこれだけ聞いた、——『いつ京都へお歸りになつて？　こんな暗いところを通つてどうして道が分りましたか』こんなに歲月はたつたが少しも彼女は變つてゐなかつた。やはり彼に取つて最もなつかしい彼女の記憶の通り、美しく又若く見えた、——しかし、どの記憶よりもなつかしい彼女の音楽のやうな聲が、嬉しさの驚きで震ひを帯びて彼の耳に達した。

それから喜んで彼は彼女のわきに坐つて、彼女に一切の事、——どんなに深く彼の我儘を後悔して居るか、——彼女がゐないで彼はどんなに不幸であつたか、——どんなにたえず彼女と別れた事を残念に思つたか、——どんなに長い間償ひをしようと思つて色々工夫してゐたか——を話した、——その間彼女を撫でさすつて、くりかへしくりかへし彼女の容赦を願つた。彼女はそれに答へて、彼が心で願つた通り、愛のこもつたやさしさで、——そんなに自分を責める事を止めるやうに頼んだ。彼女のためにそんなに苦むのはいけないと彼女は云つた、彼女はいつでも彼の妻となる資格はないと感じて居ると云つた。それでも彼が彼女と別れたのは、ただ貧乏のためである事を知つてゐた、彼が彼女と一緒にゐた間は、彼はいつでも親切であつた、それから彼女は彼の幸福を祈る事を決して忘れた事はない、もし償ひをすると云はれるやうな理由が假りにある

としても、かうして来て貰つた事が何よりの償ひになるのであつた。——たとへほんの暫らくでもかうして又會はれる事が何よりも嬉しいと彼女は云つた。彼は喜びの笑をもつて云つた、『ほんの暫らく！——いや七生の間と云つて貰ひたい。お前の方でいやでなければ、いつまでも——いつまでも——いつまでも、一緒にゐようと思つて歸つて來たのだ。どんな事があつても、もう別れない。今では金もある、友達もある、貧乏を恐れるに及ばない。明日荷物がここへ來る、家來達もここへ來てお前の世話をしてくれる、そしたらこの家を綺麗にしよう。……今夜は』彼は云ひわけのやうにつけ加へた、『着物も着換へないで、——實はただお前に會つて、この事を云ひたいばかりに——こんなにおそく來た』彼女はかう云はれて大層喜んだやうであつた、そして今度は彼女の方で、彼が去つてから京都にあつた事を色々話した、——ただ自分の悲しかつた事は避けて、それについて語る事はやさしく拒んだ。二人は夜ずつとおそくまで話し込んだ、それから彼女は、南に面した暖い部屋、——それは以前彼等の新婚の部屋であつた部屋へ彼を案内した。『この家には誰も世話をする人はないのかね』彼女が彼のために床をのべるのを見て、彼は尋ねた。『いゝえ』彼女は快活に笑ひながら答へた、『女中など置くわけには参りません、——それで全く一人で暮らしてゐます』『明日から女中を澤山置いて上げる』彼は云つた、——『よい女中、——それから何でもお前の要る物』彼等は休むために横になつたが、——眠るためではなかつた、彼等は眠られない程お互に澤山話す事があり餘つてゐた、——それで彼等は過去現在將來の事を語つた、遂にあかつきの白むやうになつた、それから我知らず武士は眼を閉ぢて眠つた。

眼が覺めた時、日光は雨戸のすき間から流れ込んでゐた、非常に驚いた事は、彼は落ちかかつて居る床板の上に敷物もなく寝てゐた事であつた。……彼はただ夢を見たのであらうか。いや、彼女はそこにゐた、彼女は眠つてゐた。……彼は彼女の上に屈んだ、——そして見た、——そして叫んだ、——そのわけは、その眠つて居る人に顔がなかつたからであつた。……彼の前に、經かたびらだけに包まれた女の屍、——骨と長い黒い絡んだ髪の外、殆んど何も残つてゐない程乾枯びた屍が横になつてゐた。

\* \* \*

次第に、——彼があかるいところに、ぞつとして胸が悪くなるやうな氣もちで立つて居るうちに、——氷のやうな恐怖がたへ難き絶望、烈しい苦痛となつたので、彼は自分を嘲弄して居る疑惑の影をつかまうとした。その近所を知らない風を裝うて、彼は妻の住んでゐた家へ行く道を尋ねて見た。

尋ねられた人は云つた、『その家には誰もゐません。何年か前に都を去つた或武士の妻の家でした。その武士が出かける前に、外の女を娶るために、その女を離別しました、女は大層惱んで病氣になりました。女は京都に親戚もなく、世話する人もなかつたやうです、それでその年の秋、——九月の十日に亡くなりました。……』

(田部隆次譯)

*The Reconciliation. (Shadowings.)*